# 愛人契約

おやつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
愛人契約

【Ｎコード】
Ｎ１７０１Ｎ

【作者名】
おやつ

【あらすじ】
平民出身の女騎士キャンは三大欲求に忠実で自己保身第一な女の子。そんなキャンが成り行きで愛人にしたミカ（オス）には事情がありそうで。身体の関係から始まる恋愛物語。
＊登場人物に良い人はあまり出てきません＆反道徳的な内容が含まれます

# プロローグ

身体は既にぼろぼろだった。ろくにご飯も食べさせてもらえず、気分次第で殴られる。物心ついた時からそんな生活だったけれど。

「キャン、さっさと服を着替えて準備しろ」

渡されたのは見た事もないような上等なワンピース。それを見て。三日前酔っ払って帰って来た父がご機嫌で語った話は事実だったのとキャンは悟った。いわく、自分は愛玩目的で貴族に売られるらしい。自分はとうとう捨てられるのだ。

諦めるという事はとっくの昔に慣れたはずなのに、最低な親だと分かってるはずなのに、何故か悲しかった。

涙が出ないから、キャンは目で父に訴える。何も言わず、ただただ金の瞳で見つめると先程まで上機嫌だった男の顔が歪み、頬に衝撃が走って尻餅をついてしまう。

「何だその目は！喜べよ！良いか？お前なんかが俺の役に立てるんだぞ？犬畜生にも劣るお前が！くそっ。お前さえいなきゃ俺だって！この疫病神！とっととどっかにいっちまえ！」

男の目は既に自分を捉えていなかった。けれど父の言葉は正確にキャンの心をずたずたに切りさいていく。

「ごめんなさい」

か細い声で謝ったキャンは、よろよろと立ち上がり男をおいて扉へと手をかける。

「おい待て。何処へ行くんだ？早く着替えろ。もうすぐ迎えが来るんだ。金を貰えるんだよ」

一転して猫撫で声で囁きかける男を振り返らずキャンは走り出す。

「おい！銀貨一枚貰えるんだぞ！」

怒声が響き、悲しくなった。自分は銀貨一枚で売られるのだ。もうちょっと高値で売れよと心中で罵倒しながら足は止めない。

ただ走って走って。表通りの近くに来た所でゆっくり歩き始める。既に日は落ち、辺りは暗くなっていた。

いわゆる治安の悪い地区なので、キャンのような幼い子供が一人歩きしていたら何処へ売られるかもしれない、と頭の片隅で考えた。それより父に売られた方が良いかな、とも思う。知らない奴を儲けさせるより、最低な父でも情はあるのだし。

帰ろう。

そう考えて踵を返した時だった。いつの間にか背後に人が立っていて、ぶつかってしまう。

「あ、ごめんなさい」

よろめきながら謝って上を見上げると、随分高い位置に顔があった。頭までローブに包まれて顔はよく分からないが、男だという事は分かる。男はじっと此方を見下ろして口を開こうとしない。けれど立ち去る気はないようで。

キャンも男を見上げて双方無言で一分程見つめあった後、言葉がするりと溢れ落ちた。

「助けて」

本気で男が助けてくれると思った訳ではない。ただ、何かにすがらずにはいられなかった。父に捨てられるという事実を前にして、悲しくて悔しくて辛くて。一言口にすると、どんどん気持ちが溢れ出した。

「助けて助けて助けて誰か助けてよ！」

今まで数え切れない程口にした言葉。誰も救いの手など差し延べてくれないと悟ってから虚しくなり、唇にのせる事はしなくなったけれど。今日くらいは思い切り絶望させて欲しかった。

この男にすがりついてみっともない所を見せて、非情なまでに切り捨てられたらきっと自分も泣ける。そしたら世の中に絶望して父を呪って貴族にでも誰にでも売られてやろう、と考えながらキャンは目の前の男の足にしがみついた。蹴り飛ばされても構わない。そう思っていたのに。

上から降ってきたのは、冷たい声だったけど意外な言葉だった。

「名は？」

思わず男の顔を仰ぎ見る。表情は見えなかったけれど、微かに見えた口角は上がっていた。

「聞こえなかったか？それとも名が無いのか？」

静かな声にせきたてられるようにして慌てて言葉を返す。

「キャン。キャンだよ」

その日初めて、キャンは助けを求める声が誰かに届く奇跡があるのだと知った。

# キス1

「ちょっとミカ！聞いてんのか！？」

セレスティア王国の城下町キオンの片隅にある酒場に甲高い怒鳴り声が響く。

声の主は１５になるというのに男というには細っこく、また女というには丸みに欠けていた。浅黒い肌に鮮血の如き真っ赤な髪、そして金の瞳は明らかに南方の血が混ざっており、北の大国セレスティアでは珍しい。

着古したよれよれのシャツと麻のズボンをはく短髪の、何処からどうみても平民の少年は、けれどその実王国では名だけは有名な唯一の女騎士カトリーヌであった。最もその事実を知る者はこの場にはいない。

彼女の愚痴を毎度聞く羽目になっている、唯酒場で働いているだけの善良で哀れな少年ミカも彼女の性別を男だと思っておりその正体を知る由もなかった。

「はいはい聞いてますよ。男にキスされたんだろ？災難だったよな、本当。ってか俺仕事中って知ってるのか？キャン」

「うわぁ。ミカ全然聞いてないし。無茶苦茶聞き流してるじゃん。客の愚痴聞くのも仕事の内だろ？常連客大事にしろよ。ご飯特盛追加！」

目の前に出された五皿はある料理を次々に空にしながらまた注文するキャンに、ミカは呆れ顔で空の皿を下げて空いた場所に先程注文されていた料理を出す。

「ほんっと細い癖によく食うよな。何処にいってるんだよその栄養は。ってかさ、うち酒場なんだけど。酒も飲まねぇ常連客なんていらねぇんだよ」
「だって此処料理上手いんだもん。酒は嫌いだから要らない」

それに知ってる奴いない穴場だし、とキャンは言葉には出さず心の中で続ける。
騎士という名誉ある地位を運と実力、いや半ば以上は運でもぎとってしまった事自体は有難いが、現時点で周囲にキャンの味方は少ない。　顔見知りという名の敵がうようよする場所でご飯を食べるのは苦痛でしかなかった。
よって騎士になった二年前からキャンは毎晩夕食をこの酒場で食べている。当時１３歳。職場のきつさに耐え兼ねてふらりと現れた痩せこけたキャンを見て哀れに思った店主が酒も頼まない彼女に文句も言わずに食べ物を出してしまった時、そして哀れに思ってミカが愚痴を聞いてやってしまった時、既に運命は決まっていた。

毎晩やって来て大量の料理を食し身なりの汚いキャンを不審に思うも、店主は金払いの良い客を追い出す事はしない。まあせいぜい金持ちの良い主に恵まれた傭兵だと当たりをつけていた。キャンは細身には似合わない大剣を常時持ち歩いていたから。
それに傭兵といっても魔物が大量発生していた一昔前と違い、今は護衛が主な仕事。戦う事は滅多にないお陰でキャンのような歳若く経験のない者でも運が良ければ職にありつける。
二年前聖女ユカリと第四王子の尽力で王国内に大量発生していた魔物の数が激減し、東の森の向こう側に魔物を追い出したから、現在は王国に残ってしまった極少数の魔物が時折街道に現れるのを警戒すれば事足りるし、国王が凄いお陰なのか店主には分からないが城下の治安も悪くない。

そして所詮雇われ人である哀れなミカはやはり今晩も自称常連客キャンの愚痴に付き合う羽目になってしまった。

「でさ、本当気色悪かったんだよ。会っていきなりぶちゅうだよ？しかも妾にしてやるって。舐めてるとしか思えない！貴族だからって偉そうに！」

思い出したのか唇をごしごし擦るキャンを哀れに思う前に、ミカは顔面蒼白になった。出会い頭に男にキスされたとは先程聞いたが。

「よりにもよって相手貴族かよ。大丈夫だったか？」

平民が貴族にたてつく事は許されない。

魔物退治の折りに平民が借り出された事がきっかけで傭兵上がりの将軍がたち、平民が軍人になる事は許された。また、聖女ユカリの護衛騎士が平民出身の女という事もあり、平民でも出世の道は開けたといえる。

しかし、まだまだ貴族偏重の風潮は残っており、キャンの様な平民が貴族にたてついたとなれば適当な理由をつけて投獄されかねない。

まさかとは思うが貴族をぼこぼこに殴ったりしてないよな、とミカは心配していた。短気なキャンの事だから、でもそこまで馬鹿ではないし、と本気でキャンの身を案じる。

口では色々いえど、二年の付き合いがあるキャンに、ミカもそれなりに愛着がわいているのだ。いつもいつも愚痴垂れ流しで酒も頼まない客だけれど。

「大丈夫。むっちゃ腹立ったけど腐っても貴族相手に喧嘩売ったりしないって。キスだけで済んだしね」

手をひらひら振ってミカの心配を受け流しつつ、やはり夕刻の事を思い出してキャンの眉間に皺が寄った。

その男がやって来たのは夕刻の訓練が終わってすぐの事だった。経験実力不足にも関わらずいわば特例で護衛騎士という重要な肩書きを手に入れたキャンは、時間を作って第四王子の率いる第一騎士団の訓練に参加している。一番年少という事もあって最後まで残り片付けをしていたキャンにその男、キャデリーヌ男爵の長男ジョシュアが声をかけてきたのだ。ジョシュアは城内で知らぬ者はいないという程有名な男色家である。そして彼はこう言い放った。

「お前がカトリーヌか」

キャンは怪訝な顔をして頷いた。如何にも貴族然とした小奇麗な身なりの優男に舐めるような目で見られたからだ。こういう視線にどんな意味が込められているか、分からない程鈍感ではない。

騎士団唯一の女であり平民出身という事もあってそうした好奇と侮蔑の入り混じった卑らしい視線を投げかけられる事は珍しくもないのだし。けれど大体は一見して男だと判別してしまう、しかも平凡な顔立ちを前に行為に及ぼうとはしないのだが。ジョシュアは違った。

「ふん。まあまあか」

強引に顎を掴み至近距離でキャンの顔を眺めた後、前触れもなく深いキスを仕掛けてきたのだ。その上細い身体をきつく抱きしめてからこう言った。

「ああやっぱり抱き心地が悪い。まあでも我慢出来なくもないか。お前それ以上肉を付けなければ妾にしてやっても良いぞ」

と。ふざけんじゃねえよ何様のつもりだてめえ、と口まで出掛かったその言葉を普段は滅多に使わない忍耐を駆使してキャンは押し殺した。

そしてそこで我慢した分ミカにぶちまける。

「でもほんっと気持ち悪かった！男にキスされるとか最悪だしっ。見目が良いからって誰も彼もがなびくと思うんじゃねえよ！あんな奴こっちから願い下げだ！」

勿論ジョシュアの意図などキャンも分かっている。

貴族に生まれてしまったがばっかりに男色家にも関わらず跡継ぎをもうけなければ、ひいては女と寝なければならないと。だからこそ男の様なキャンを妾に望むのだろう。

けれど何も自分じゃなくても良いじゃないかと思わずにはいられない。位の低い貴族の女を自分好みに髪を短くして男らしく仕立てあげやがれと半ば八つ当たりのように叫びたくなる。まあ恐らくキャンで実験して女とセックス出来る事が判明すればそのようにして跡継ぎをもうけるのだろうが。平民など貴族にとっては実験体にして使い捨てる程度が関の山だ。いくら悔しかろうとキャン一人が嘆いた所で社会の仕組みが変わらない事もよく分かっていた。

「まあ飯食って落ち着けよキャン。お前が男色家じゃねえのは分かってるからさ」

「当たり前だっ！」

何せキャンは女である。男色家という言い方は当てはまらない。
勿論ミカの勘違いを分かった上で発言している。嘘を吐かずに真実を告げずに愚痴を吐くのは慣れたものだ。

「まあ良いけどさ。そうだ聞けよ。あんまりムカついたから近くにいた奴にきっついキスかましてやったんだ。その時のあいつの顔。涙目になってやがんの。自分だけ嫌な思いすんのはまっぴら御免だかんな」

男色家の貴族と間接キス。しかも男みたいな自分とのキス。これ以上の嫌がらせは無いだろうとキャンは一人悦に浸る。自分の不幸を他人にお裾分け。
うん、良い腹いせになったとにやにや笑い出す常連客を眺めてミカはその不幸をお裾分けされた哀れな犠牲者を思ってため息を吐いた。

「それ完璧な八つ当たりじゃねえか」
「勿論。八つ当たり以外の何物でもない」

堂々と言い放ち、キャンはご飯を追加注文した。

## キス2

ミカに散々愚痴ってキャンは満足していた。
ジョシュアにキスをされた事など一日経てば頭にない。食べて寝たら嫌な事は忘れる。人並みに悲惨な経験を積んで得た教訓通りに“不幸のお裾分け”の事もすっかり忘れていつもの様に朝早く仕事先である聖女の元に向かった。

「お早う、カトリーヌ」

今日も今日とて上司は見目麗しい。キャンの見た目もセレスティアでは珍しいが、それ以上の稀少価値を持つ聖女の黒い瞳にうっとりしながら言葉を返した。

「お早うございます、ユカリ様。本日もご機嫌麗しゅう」

後ろで複雑な形に結われた真っ黒な長い髪もこの国では珍しい。いや、黒目黒髪の人間などこの大陸に聖女以外に存在しない。
聖女ユカリは二年前大量発生した魔物を倒す為にヤーン神がこの地に遣わした天使なのだ、というのは表向きの話である。
実際にはユカリの故郷には黒目黒髪の人間はたくさんいて、異世界とかいう所から来た唯の人間なのだとキャンは聞いていた。そんな国家機密といえる重要事項を知ってしまい、更には彼女に気にいられたからこそ平民の女でありながら護衛騎士という地位を手に入れる事が出来たのだ。
キャンは元々それを狙って聖女に取り入ったのだけれど、貴族の連中とは違い同じ目線で話をしてくれる女主人をかなり気に入っている。彼女の前では堅苦しい言葉遣いをしなくても良いのだし。

「ねえ、ところでキャン」

キャンと呼ばれたら普通の言葉遣いで話せという合図。別に予め決めた訳ではないけれど、何時の間にかそうなっていた。

カトリーヌとは聖女の護衛騎士になった時に後見人が勝手に付けた名である。犬猫でもあるまいしキャンという名では聖女様の護衛騎士としてふさわしくない、と言われてまあキャンも納得した。聖女が公の場ではカトリーヌ、私的な場ではキャンと呼び分けている為、何となく周囲もそれに従っている。

「何？ユカリ」

朝食の後の紅茶を優雅に飲みほし、ユカリはじっと闇のような黒い瞳を向けて口を開いた。

「恋人できたって本当？」

キャンは硬直した。

男ばかりの騎士団の中で下ネタを話すのは全く苦にならない。というか慣れてしまった。

しかし女であるユカリに恋愛話をふられると、背中がむずむずする。要するに恥ずかしい。照れる。すっかり男の思考に染まってしまったキャンはけれど努めて平坦な声を出した。

「何故そのような話に？」

自然と硬い口調になるが、ユカリはそれには構わず、紅茶を注いでくれた仲良しの侍女マリーと目線で言葉を交わしふふっと笑う。仲間はずれにされた気分だ。

「ああ怒らないで。なんかね、昨日騎士見習いの人とキスしたんでしょう？それでキスがすっごく上手かったって噂を聞いたの」

何時の間に恋人作ったの？早く教えてくれれば良いのに、と言葉を続けるユカリ。

正直勘弁してくれ、とキャンは思った。っていうかキスが上手いって何だよ。そりゃあいつは童貞なんだからキスできりゃ誰でも上手いと感じるだろうよ、なんて仮にも聖女の前では言えない。流石に下品だ。

仕方なく、本当に仕方なく、キャンは弁解を口にする。

「恋人じゃないよ。実は昨日男色家で有名なキャデリーヌ男爵の跡継ぎ様に襲われて。適当に近くにいた奴で口直ししたってだけ」

ここぞとばかりに男爵の事をユカリに告げ口してみる。

一応気に入られてるんだし聖女が口利いてくれたら儲けもんだ、とかいう下心が無いとは言わない。ついでに言えば“不幸のお裾分け”をした騎士見習いのイアンは事あるごとにキャンにチクチク嫌味をいってたから八つ当たりの相手として最適だったとは懸命にも口に出さなかった。

そしたら変な情報が出てきた。

「え？襲われたってもしかしなくてもジョシュアとかいう金髪男？あいつキャンにまで手出したの？ショタどころかロリコンじゃないあの変態。この前アレクに迫ってみっちり絞られたの覚えてないのかしら？ああ頭の中まで腐ってる奴だから身体に叩きこまなきゃ覚えないのよねきっと」

ショタとかロリコンとか聞きなれない言葉は聞き流しておく。ユ

カリと話してると時たま彼女の故郷の言葉が出てくるのだ。昔は逐一意味を聞いていたけど、結構どうでも良い単語が多い事に途中で気付いた。

「ってアレクシス様にまで手出してたの？」

思わず合いの手をいれたキャンにユカリとついでに侍女のマリーが苦笑いしながら頷く。

アレクシスはキャンが訓練に参加させてもらっている第一騎士団の団長であり、皇位継承権第二位をもつセレスティア王国の第四王子であり、聖女を異世界から喚び出した張本人であり、そしてユカリの夫である。銀髪碧眼の美丈夫。こざっぱりとした短髪の彼は、長髪を好む貴族らしくないと批判に晒される事も多いが、一方で精悍な顔立ちを際立たせていて格好良いと軍人には高評価も得ている。

しかしその内実は長髪の時分女と間違えられて襲われた事が多々あったから短髪にしているのだと知ったキャンは笑った。それから一週間アレクシスの姿を見る度に笑いを堪えるのが実に大変だった。

そのアレクシスが男色家の餌食に、と考えるだけでやはり笑えてくる。キャンは自分もまた餌食にされかかった事などとっくの昔に忘れて遠慮なく笑った。

「まあアレクシス様お綺麗だからっ、無理っやっぱ笑う、もう限界っ」

「って貴方も襲われたんでしょう！？大丈夫だったの？」

腹を抱えて笑い出すキャンを見やるユカリの表情は呆れてますといわんばかり。しかし口調から心配されている事もはっきりと伝わってきたので、きちんと真面目に答えた。

「大丈夫、かな？なんかキスされて抱きしめられて妾にしてやるとか言われたけど。抱きしめた後肌にサブいぼできてたから、多分あいつ本当に女駄目なんだよ。ああ本当こんなナリしてるけど女で良かった」

心底嬉しいとばかりに上機嫌なキャン。

ミカには言わなかったが、キスされて抱きしめられ妾宣言された後、試しに胸を触らせてみたのだ。悲鳴は上げなかったが、その時にサブいぼ立った両腕をさすりつつ顔をしかめたジョシュアを見て自分はもう狙われないと確信した。

実はその時点で溜飲は下がっていたので、イアンにキスしたのは八当たりというより嫌がらせの方が近い。

まぁ真実は自分一人が知っていれば良いのだし、とキャンはジョシュアの事を頭から追い出してもう一つの懸念事項を口にする。

「それよりイアンとキスした事そんなに噂になってるの？」

嫌がらせなんてするんじゃなかったと後悔しても時既に遅し。聖女の耳に入っているという事は、既に城内で噂になっていると考えた方が良いだろう。

げんなりしつつ問いかけると、ユカリは口端を上げて楽しそうに声を弾ませた。

「勿論。全く男の影がなかった噂の女騎士初の恋愛スクープだもの。まぁ恋人じゃないのにキスするのはどうかと思うけど、キャンももうお年頃なんだから恋人の一人や二人作っても良いんじゃない？」

やっぱりそういう話になるのか、と半ば予想していたが溜め息をつきたくなる。確かに１５といえば恋というものに興味が芽生え始めるお年頃なのだろう。

「まぁ軍の奴らも娼館に」

連れて行かれて筆下ろししてもらうお年頃だし。

そう言おうとして目の前にいるのがユカリだという事を思い出した。途端にきつい眼差しで睨まれキャンは冷や汗を流す。

「キャン」

低い声で呼ばれて条件反射で背筋がしゃきんと伸びた。

まずった。確実に失言だった。

「良い？貴方は女の子なの。確かにむさい男しかいない軍の中にいたら、ある程度合わせなきゃいけないのは分かるけど、少しは恥じらいを持ちなさい」

「はい」

こういう時のユカリに逆らうと後が怖いので素直に返事をしておく。

するとにっこり邪気のない笑みを浮かべたユカリは、最後にこう言い放った。

「貴方もいつか結婚するんだから」

キャンは苦笑いするしかない。善良なユカリの事は好きだけど、こういう所は苦手だな、と思いながら。

## キス３（前書き）

強姦描写があります。またそれに対する主人公の反応が一般的ではありません。フィクションである事を念頭に置いて御一読下さい。

## キス3

一週間が経つ頃には噂は尾びれ背びれをつけて広がっていた。
キャンの耳に入っただけでも、淫売・将軍に身体で取り入って地位を得た・騎士団の男連中を百人斬りしてる、などすさまじい捏造っぷりである。
そもそもの発端である貴族の馬鹿息子が噂に登場しないのは、やはり裏で手が回っているのか。まぁその点は別に構わない。あれ以来キャンの前に姿を現さないのは対象から外されたか、もしくはユカリがどうにかしてくれたのだろう。
とにかく過程はどうであれ自分に被害が及ばなければどうでも良いのだ。

しかし、噂はいただけない。
これなら”不幸のお裾分け”をした騎士見習いイアンと恋人だというデマの方がまだマシだったと胸を張って言える。しかし当のイアンはあれ以来キャンの顔を見るなり頬を赤らめて逃げ出すので話にならない。
周りの連中は童貞には刺激が強すぎだ、と同情する始末。俺にしとけと誘いをかけられる事多数。その光景を見た侍女が噂を膨らます。正に悪循環。

あのぼんくら貴族のケツに剣ぶっこみてぇと危険思考に捉われていたキャンは、けれど常識的にその苛立ちを剣で発散させる事で無事にその日を終えたはずだった。その男が声をかけて来るまでは。

「ようキャン」

声を聞いただけでげんなりするが、悲しいかな、声の主はキャンの同僚な上に先輩。もう今日はその顔を見ないで済むはずだったのに、という心境をそのまま表情に出しながら振り返る。

ユカリの夫アレクシスの従兄弟であるルーファスは彼と同じ艶のある銀髪を肩の辺りで緩く縛っているが、逞しい体躯をしているせいかアレクシスと違い一見で男だと分かる。しかも色男で自分でその魅力を分かっているからタチが悪いとキャンは思っている。色気があるとご婦人方に人気の垂れ目の下にあるほくろをいつかほじくり出してやりたい、と常々思っている事は一応秘密だ。多分敵意だだもれなので何となく気付かれているだろうが。

「何か御用ですか？もう自分の勤務時間は終わっていますが。先輩はまだでしょう？ユカリ様のお傍にいなくて良いんですか？」

聖女ユカリの護衛騎士はキャンとルーファスの二人だ。最もキャンは年齢や実力の問題があり、時間の自由がきく。認めるのは癪に障るがユカリのお情けでなった本当に名ばかりの護衛騎士なのだ。一方のルーファスがこんな所を一人ふらふらしていてはいけないはずなのだが。

「そう睨むなよ。ユカリ様はアレクシス様と遠乗りに出かけられたから俺はお役御免なの。という訳でお前は今から俺に付き合う事」

アレクシス様の馬鹿野郎、とキャンはとりあえず心中で叫んでみた。

ユカリ大好きな彼は時々護衛を付けず二人きりでお忍びに出かける事がある。仲睦まじくて良い事だと常ならば歓迎するのだが時期が悪い。明らかに嫌な予感がひしひしとする。

「お断りし」
「あ？聞こえないねぇ」

台詞の途中で遮るルーファスに殺意が沸き上がる。
女相手には滅法優しい彼だが、男相手には情け容赦ない。因みにキャンは彼の中で男に分類されている。騎士になった当初は女扱いされていたのだが、余りにも背筋がぞくぞくするような言葉や仕草で接してくるルーファスにすぐに音を上げた。半泣きになりながら頼みこんで男扱いにさせてからは実に酷い扱いを受けている。
女扱いされるよりマシだと今まで辛抱していたが、今回ばかりは身の危険を感じた。いやでも女扱いされないはずだし、と混乱しつつあるキャンが連れ込まれたのは騎士団宿舎にあるルーファスの自室であった。

「まぁ座りなさい」

そう言って彼が指したのは固いベッド。その時点で既に察したキャンは扉を背に説得を試みてみた。

「いや先輩、早まるのは良くないと思います。先輩ならこんな男みたいな小僧に手出さなくても、もっと良い女一杯見つけられるじゃないですか。それとも先輩実は男色家だったとか？ならアレクシス様とかの方が顔も綺麗だし楽しめますよきっと」

混乱しきったキャンは国の王子を売ってみた。けれどもルーファスは再度言葉を繰り返す。

「座れ」

半べそをかきながらキャンはベッドに移動した。

平民は権力に弱いのだ。平騎士ならまだ強く出る事ができるが、相手は同じ護衛騎士の先輩で立場も実力も上な相手。逆らうと後が怖い。

「で、キャン。最近とある噂のせいで軍の連中が浮わついて困っているんだよね。弁明があるなら聞くよ」

尋問形式で始まったが、行き着く先は見えている。自分可哀想と己の身に振りかかった不幸をひとしきり嘆いてから、キャンは覚悟を決めた。顔を上げ、ルーファスの碧の瞳を見据えながら口を開く。

「イアンとは成り行きでキスしましたが噂はほぼ偽りです」

本当に嫌がらせなんかするんじゃなかった、と嘆いても現状は変わらない。返ってきたのはほぼ想像通りの言葉だった。

「へぇ。じゃあキスが上手いっていう噂は本当？」

どう答えても先が見えている。どうせ確かめさせろとか言ってキスされるんだ。本当自分って可哀想。

「さぁ」

一先ずとぼけてみた。

「じゃあ確かめてみようか」

予想通り過ぎて捻りがない。なんて批評しても、現実は変わってくれない。

迫り来る端正な顔を避ける事はせず、けれど最後の抵抗をキャン

は試みた。
「男扱いして下さいって頼んだ記憶があるのですが」
「この部屋限定女扱いっていうことで」
この色情魔！という叫び声はあえなくルーファスの唇によって塞がれた。

半ば無理矢理抱かれたはずだった。なのにルーファスは最中ものすごく優しかった。なもので服を着たキャンはベッドの上で呆然としている。
本当どうしよう。正直気持ち良かった。かなり良かった。痛いだけの記憶しかなかった行為がこんなに気持ち良いとは思ってなかった。快感を与えたのが嫌いな先輩だという事を除けば結構得した気がする。

なんて考えているキャンの横で、ルーファスも呆然としていた。確かにキスは上手かった。だがそれ以上に身体が男慣れしていた。
ルーファスがキャンと出会ったのは彼女が１３の時。それ以来一番近くにいたのはルーファスだがキャンに男の影はなかった。という事はそれ以前？考えれば考える程嫌な想像しか出来なくなる。興味本位で手出したのは失敗だったか、と後悔する。
それに一度抱いてみたらキャンを女としか見られなくなってしまった。これはまずい。いっその事騎士を止めさせて妾にでもするか？と考え始める。
ユカリが聞いたら殴る蹴るの暴行を加えた上即刻解雇しかねない

思考を重ねているルーファスの傍ら、キャンはさっと立ち上がった。

「では先輩、約束通りこの部屋出たら男扱いでお願いしますね。もうこの部屋には金輪際一生出入りする気はありませんので、その旨宜しくお願いします。では失礼します」

さっと礼をして部屋を出たキャンの耳に引き留めるルーファスの言葉は届かない。

既にキャンの頭からルーファスの存在は消去されていた。嫌な記憶を留めておいても自分が可哀想になるだけだ。

それより、と考えるのは先程の行為のこと。あれは気持ち良かった。騎士団の男と関係を持つのは面倒臭い。何処かで男買えないかな、とキャンは上機嫌で夕飯を食べる為にいつもの酒場へと向かった。

# 愛人1

「いらっしゃい。あれ？今日は機嫌良いんだな、キャン」

店に入るなりそんな事を言ってきたミカに軽口を叩きながらキャンはいつもの席に座る。

「今日はって何だよミカ。適当に五品くらいお願い」

「了解。って自覚なかったのかよ。ここ一週間ずっと機嫌最悪だったぜお前」

ミカに指摘され流石に自覚があったキャンは押し黙るしかなかった。

確かに噂が流れ出してからの一週間は全身で不機嫌ですと訴えていた気がしなくもない。まあでも嫌な事より良い事優先で。早速キャンはミカに話を持ちかけてみる。

「なあミカ。知り合いでさ、金に困ってて口固くてそんなに年いってなくて酒も薬にも手出してない奴いない？」

職場である城内で男を探すのを諦めたキャンは城下町で男を漁る事にした。流石に現在出回っている噂は嘘っぱちだとユカリも分かっているからお咎めはないが、噂を真実にしたらキャンが解雇されかねないからだ。

暫く軍では大人しくして、適当に職場外で男を買おう、という思考。しかし娼館で女は売っててもは売っていない。だからとりあえずミカづてで探そうと思い立った次第だ。

哀しいかな、二年前に騎士として王都に来たキャンに、友達とい

える人物はミカ以外にいないのだ。

「何だよそれ。ヤバイ事でもやるつもりか？」

眉をひそめるミカに笑って否定する。

「ヤバくないよ。個人的に仕事を頼みたいってだけ。捕まったりはしないけど本当に個人的な事だし他人に知られたくないから信用できる人が良いんだ。良いのいない？」

流石に聖女の護衛騎士が男を買うとなると人の目が気になる。まあ相手にキャンの正体がバレなければ良いのだが、女の剣士で南方の血が入っていると分かれば簡単に推測できてしまう。それほどまでに女騎士カトリーヌという名は一人歩きしてしまっているのだ。

ああやりづらい面倒臭いと思いながらもキャンはミカの返答を待った。

「それって期間は？長いの？あといくら？」

矢継ぎ早に質問されキャンも考えながら答える。

「とりあえず一晩で銀貨一枚。それで良さそうだったら次頼むかもって感じ」

平民の平均月給は銀貨五枚。一晩で一枚稼げるとなれば結構高値なんじゃないかとキャンは思う。最も聖女の護衛騎士となったキャンの給料に比べれば安いものだが。

「おい注文！」

なにやら考えこんでしまったミカは他の客の声で我に返るとぽんと軽くキャンの肩を叩いて返事をした。

「只今！キャン、後でその話詳しく聞かせろ」

色よい返事をもらえて満足したキャンは、その後忙しくなった店内でせわしなく働くミカが落ち着くのをもりもり食べながら待った。どんな人を紹介してもらえるのだろう、と内心わくわくしながら。

「で？良い人いそう？」

忙しさに一区切りがついた所で店の裏口に連れ出されたキャンは地べたに座り込み、戸口に背を預けるミカを見上げる。難しい表情を浮かべて押し黙るミカにやっぱり駄目か、と落ち込みかけた時だった。

「俺じゃ駄目か？」

そんな言葉に思わず目を見開いたキャンに、ミカは早口で言い募る。

「口の固さは保障するし年もいってないし酒も薬も嫌いだ。ってかその条件何だよって感じだけどまあお前がヤバイ事やってないって事は信用するからだから」

一旦言葉を区切り、強く瞼を閉じたまま押し殺したような声で繰り返した。

「俺じゃ駄目か？」

ぽつりと落とされた言葉に必死さが感じ取れてしまい、とりあえずキャンは聞いてみた。

「そんなに金に困ってんの？」

途端じろりと睨みつけられたが、頬が赤く染まっている事から察するに、本当に困っているのだろう。そしてその事実をキャンに知られるのが恥ずかしいと思っているのだ。ちょっと可愛いな、と思う。優越感を感じてしまう。

改めてキャンはミカをまじまじと見つめた。

月明かりで照らされた顔は悪くないと思う。店内は薄暗く明かりの元はっきりと顔を見た事はないが、目鼻立ちはすっきりしている。肩まで伸びた茶色の髪は不潔にならないよう後ろで結ばれており、ミカが歩いているのを後ろから見ると結ばれた髪がふわふわ揺れるのだ。それを眺めるのがキャンは結構好きだった。体つきは少々痩せているが、むさい男は職場で飽きる程見飽きているのでミカくらい細い方が良いともいえる。

「うん、合格」

じろじろと舐めるようなキャンの視線に晒され居心地悪そうにしていたミカは、その言葉にぱっと顔を輝かせた。

「本当？」

「うん本当。じゃあ三日後の夕方くらいから！店休める？」

三日後なら次の日休みを貰える為ゆっくりできる。頷いたミカに

満足してさあ帰ろうと立ち上がり、家路につこうとしたキャンの背中に焦ったような声がかけられた。

「おい結局仕事って何やるんだよ」

くるりと振り向きキャンは満面の笑みで言い放つ。

「内緒！」

ああ本当に三日後が楽しみだ。

# 愛人2

ミカと約束を取り付けた次の日。いつも通りの一日を終えてさぁ酒場に行ってミカをからかおうと、ユカリの居室に近いキャンの自室で準備をしていた時だった。
突然アレクシスの遣いがやって来たのだ。

「カトリーヌ。今から殿下がいらっしゃる」

遣いと言ってもその正体はアレクシスの直属の部下である騎士。キャンもよく知っている人物だ。
コリンという名の上背のある彼は、常時真面目くさった表情しか浮かべないつまらない男だ、というのがキャンの評価。今もそれ以上余計な事を口にしようとせず、ただ扉の前に立ってキャンが出て行かないよう邪魔をしていた。図体のでかい彼が突っ立っているだけで威圧感がある。
キャンは一つ溜め息を吐いて自分の格好を見下ろした。城下へ行く準備をしていたキャンは、既に一国の王子と面会するには不敬になってしまう程みすぼらしい格好になっている。

「着替えたいのですが」

せめての抵抗を口にするも、コリンは動く気配がない。キャンも分かっている。この男は決してキャンの着替えを見たい訳ではなく、興味がないだけなのだと。この堅物め、と内心悪態をついた時だった。
コリンがすっと身体の位置をずらし、王子が姿を現してしまった。

「久しぶりだな、キャン。出掛ける所だったのか？」

気安い口調に似合わない優雅な足さばきで部屋に入って来たアレクシスに、キャンは騎士の礼をとってから非礼を詫びる。

「若輩者の身にお気を掛けて頂いて光栄です。この様な格好でお出迎えする事どうぞお許し下さいませ」

そのまま下を向いていると、すぐに声がかかった。

「許す。顔を上げろ」

言葉に従いゆっくりと上げた視線の先で、アレクシスは苦笑いしていた。

この少しの時間でどんな無言のやり取りがあったかは知らないが、いつの間にかコリンはいなくなっている。人に聞かれたくない話、尚且つ初めに〝キャン〟と呼ばれた事から私的な話だろうと当たりをつけた。

ルーファスと違い、ユカリ大好きなアレクシスと部屋に二人きりになっても身の危険は感じない。知らず緊張していた肩から力が抜けるのを合図にアレクシスは口を開く。

「安心しろ。あの馬鹿と違って何もしないと誓う」

予想もしなかった言葉に目を見開くキャンに、アレクシスは端正な顔を歪めて椅子に乱暴に座った。

「昨夜大体の事は聞いた。あれであいつも反省しているらしい。許してやれとは言わないが、この時期あの馬鹿を野放しにした俺にも非がある事は認めよう」

本当にな、と懸命にも口には出さずキャンは同意した。噂が広がって馬鹿な事を考え出す奴の筆頭に自由を与えたのはこの王子だ。
だがそれよりルーファスが全部アレクシスに話したという事が意外だったのだが。

「それでだ。あの馬鹿が責任取ってお前を妾にしたいと言って来たんだが、キャンの意見を聞きたい」

心底疲れた表情で視線を向けて来るアレクシスに、キャンは少しだけ同情する。
昼間ルーファスと顔を合わせた時はいつも通りというぞんざいな扱いを受けてキャンも安心していたが、まさか王子にそんな相談を持ちかけていたとは。相談された王子もそりゃ疲れるだろう。相手が唯の平民だったらいざ知らず、キャンは彼の妻であるユカリのお気に入り。潔癖な所があるユカリが事を知れば激怒しアレクシスまでユカリの非難の対象になる事間違いなし。それを避ける為にわざわざこんな所まで足を運ぶ羽目になったのだろう。
可哀想な王子、と哀れみに満ちた視線を向けながらキャンは口を開いた。

「ご心配なさらず。妾にされずとも、金を貰わずとも誰にも話すつもりはありません。自分としてもルーファス様とは先輩後輩として良い関係を築いていきたいですから」

本心からキャンは事を荒立てるつもりはなかった。要は次が無ければ良いのである。今更ルーファスを責めるつもりはない。まぁ今まで以上に嫌いになったが。
きっぱりと言い切ったキャンに、アレクシスはやっと表情を柔らげた。

「それは良かった。ルーファスにもそのように伝えておく」

にこにこと微笑む彼は、ゆっくりと余裕を持って立ち上がるとあぁと思い立ったように口を開く。

「そういえばユカリから聞いたが、キャデリック候の馬鹿息子の被害にもあったって？」

面白そうに笑いながら聞いてくるアレクシスに先程までの殊勝な態度は欠片も見えない。騎士仲間としてからかう顔だ。嫌な予感がひしひしとする。そして案の定というべきか。

「この前あいつに言ってやったんだよ。『妻の一人も娶らないで男のケツ追っかけてばっかりだと次男に家督を取られるぞ』って。それでキャンに手出す辺り間抜けだよな、あいつ。もうお前にちょっかい出さないよう手回しておいたから安心しろ」

放たれた台詞にキャンはかろうじて笑顔を保つ事ができた。全ての元凶はお前か！と叫びたくてたまらない。けれど哀しいかな、権力の前に歯向かう事は出来ないのだ。

「ご配慮有難う存じます」

拳をギュッと握る事で何とかお礼を言う事ができた。貴族なんて王族なんてくそくらえ、と内心叫びながら。

「今日は昨日と違って不機嫌なんだな。そんなにころころ感情変え

て疲れないか？」

アレクシスに向けられず不完全燃焼に終わった怒りをそのまま酒場に現れたキャンに、ミカは呆れ顔で声をかける。それを無視してキャンはひたすらご飯を口に入れた。正体を伝えていない為、今回の件は愚痴を吐けない。そういう時は満足するまで無言で食べ続けるのだ。

長い付き合いでそんなキャンの事を分かっているミカは肩をすくめてその場を立ち去る。どうせ食べて満足して帰る頃には元気になっているのだから心配するだけ損である。

そしてミカの予想通り、帰り際には満面の笑みで金を取り出した。

「ご馳走様！で、ミカ。明日は来られないから明後日八の鐘が鳴る頃そこの噴水前で」

次の日の夜は珍しくユカリの護衛騎士としての仕事が入っていた。ユカリは普段夜会には出ないのだが、アレクシスの付き合いで断られなかったらしい。そういう時はキャンも借り出される。貴族連中の顔色を伺うのは苦手だが、おこぼれで貰える美味しい料理を餌にやる気を捻り出そうと考えていると、顔をしかめたミカが不機嫌そうな声をかけてきた。

「了解。でさ、結局仕事って何な訳？」

「勿論、明後日のお楽しみ」

にやにや笑って告げるキャンに、ミカは深い溜め息を吐いてそれ以上の追及を諦めた。

# 愛人3

「ミカお待たせ！」

噴水の脇に所在なく佇んでいたミカに声を掛けるや否やその肩に遠慮なく腕を回してキャンは歩き出す。

一方のミカは突然現れた待ち人の装いに、唖然としながら戸惑いをそのまま口に乗せた。

「えっちょっとキャン？」

自信無さげな声を出したのも無理はない。

無理矢理歩かされながら横目で観察するが、キャンの衣服は上等な絹で出来ており縫い込まれた細かい刺繍を見ても高い代物だと見てとれる。いつも持ち歩いている大剣ではなく細身の剣を飾るのは大きな赤い宝石。極めつけに目立つ赤い髪を器用に洒落た帽子にまとめてしまえば、どこにからどうみても。

「お忍びで遊びに来てる貴族のボンクラ坊っちゃんっぽい？」

にやりと笑ってミカの疑問を指摘する声は確かにキャンのもので、やっとミカは胸を撫で下ろした。

「すごくそれっぽいよ。キャンって一体何者な訳？」

「それはまだ言えないなぁ。店は休めたのか？」

肩をすくめて話を反らすキャンに一応ミカも乗ってやる。

「あんま休んでないから今日くらいゆっくりして来いってさ。恋人とでも遊んで来なって言われた」

その言葉を聞いたキャンは焦った。重要な事を聞き忘れていた。

「お前恋人いるの！？」

それは不味いと思う。流石のキャンも恋人のいる男を買おうとは思わない。

思わず声を荒げたキャンに、ミカは怒鳴り返した。

「いなかったら悪いかよ！」

「あっごめん」

恋人がいない事を気にしている様子のミカには悪いが、安堵の余り気の抜けた声が出る。

それに益々腹を立てたミカをなだめすかしながらキャンは目的の場所へと向かった。

「え？此処？」

さぁ入ろうと肩を抱いたまま歩き出したキャンは、しかしミカが動こうとしない為につんのめってしまう。

「あぶなっ。ちょっとミカ？」

様子を伺うと、血の気の引いた顔で肩に回した腕を強引に外された。

「お前！男色家じゃねぇって言ってたじゃないか！」

次いで叫ばれた言葉にミカの勘違いを悟る。

今正に足を踏み入れようとしたのは、俗に言う連れ込み宿。しかも男同士でも入れる珍しい類の。よくそんな事知ってたなぁと感心しながらとりあえずキャンは否定してみた。

「うん。男色家じゃないよ。まぁ詳しい話は後でするからとりあえず中入ろうよ」

「大抵の奴はそう言うんだよ！騙されるか！」

激しい拒絶反応を見せるミカは以前騙された経験があるのだろうか。ありそうだな、可哀想に、と思いながらこの場で過去に触れる事は止めておく。からかいのネタにはなりそうだが、怒らせて逃げられたら面倒だ。

ちょっと考えてキャンは行動に出た。

ミカの手を掴んで自分の胸を触らせてみたのだ。あるかないかの胸だが、一応膨らみらしきものはある。念の為、と次に股の間にも手を入れさせる。服越しだがアレが無いのは確認できるだろう。

されるがままになっていたミカは、そこでやっと我に返ったようで強い力で手を振り払い意味のなさない言葉を口にした。

「え？あれ、何で？だって。えぇ？」

まじまじとキャンの顔を見つめて混乱状態にあるミカを、これ幸いと力づくでキャンは建物の中に連れ込んだ。入り口の親父に金を渡して部屋へ向かう。

放心状態のミカが再び理性を取り戻した時には、部屋にぽつんと置かれたベッドに座らせられていた。

「大丈夫？」

正面の床に座り上目遣いで見つめてくるキャンは帽子を取ってその顔立ちを露にしているが、じっくり眺めても男にしか見えない。

色々と聞きたい事が多すぎて口をぱくぱくと開いた後、結局ミカは信じたくない事実を無視して一番気になっている事を口にした。

「結局仕事って何な訳？」

疲れきって額に手を当てながら聞いてくるミカに、キャンは楽しくてたまらないと謂わんばかりの笑みを浮かべる。いつもいつも職場ではからわれる側にいるから、逆の立場が新鮮なのだ。何と言ったら良い反応が返ってくるか。少し考えてからキャンは返事をした。

「愛人」

簡潔な言葉でまとめてみる。

妾と言ってやろうかとも思ったが、生涯囲う訳ではないので止めておいた。

「え？誰が？誰の？」

予想通り再び混乱状態に陥って目をぱちくりさせているミカに顔を近付けると大きくのけ反られた。これはムカつく反応だ。お仕置きとばかりに額を小突いてから質問に答えてやる。

「お前が」

言葉を区切ってミカを指さした。

「自分の」

キャンは自分を指さすと満面の笑みで最後にゆっくり言い放った。

「愛人」

「え、無理」

即座に断られて反射的にキャンは頭突きをかました。悲鳴を上げるミカに衝動的に怒鳴りつける。

「何でだよ！金に困ってるんだろ！一晩で銀貨一枚ってかなり良い条件じゃん！？」

「困ってるさ！困ってるけどこれは何か色々おかしいだろ！」

負けじと怒鳴り返してきたミカに反論しようと口を開きかけた時だ。

掌を突き出され、一先ず話の主導権を譲ってやる。

「まずは話を整理しよう。キャン。お前は女なんだよな」

「何なら脱ごうか？」

喧嘩越しに言葉を寄越すキャンをミカはげんなりとした表情で押し留めた。

「いや、良いよ。分かった。うん理解する」

余程衝撃的だったのか、ふるふると頭を振る事で思考を切り替え

て、キャンが女である事を前提にミカは話を続ける。

「それで、キャンは金を払ってまで俺を抱きたい、じゃなかった俺に抱かれたいんだよな」

「別にミカじゃなくても良いけどね。今から他の人紹介してくれても良いよ」

完全にキャンはふてくされていた。

この日をすごく楽しみにしていたのだ。まさか断られるとは思っていなかった。

キャンの知る世界では金と地位がものを言う。ルーファスが地位でもってキャンを抱いたように。ミカだって金をちらすかせば簡単に話を受け入れてくれると思っていたのだが。

「そこだよそこ。好きでもない男にほいほいやらせるのは絶対良くない。今は良くても将来絶対後悔する」

その台詞にキャンの気持ちは急速に冷めていった。自然と低い声が出る。

「好きな男なんて出来ないよ。そんなの要らない」

「何でだよ」

「理由を話す必要性が感じられない」

これで話は終わりとばかりに、キャンは立ち上がった。

既にミカに対する関心は自分でも驚く程に薄れている。あんなに楽しみにしていたのに。憤りを露に戸口へと向かいかけたキャンの足を止めたのは、焦ったようなミカの言葉だった。

「待てって。必要性ならあるだろ？俺はもうお前の事情に巻き込ま

れてるんだから」
「話したら仕事引き受けてくれるの？」
振り返らずに答えたキャンは、〝仕事〟という単語に眉をひそめたミカの表情を見る事はなかった。
「話による。都合悪い事は言わなくて良いから、せめて俺を納得させろよ。俺は無理でも知り合い紹介する事くらいは出来るかもしれないし」
キャンがやっと振り返った時には既にミカは苦笑いを浮かべていた。いつもキャンが愚痴を溢している時に浮かべる表情。しょうがないなぁと謂わんばかりのそれを見ると、何故か気分が浮上してしまう。
「そこまで言うなら話してやらなくもない」
「何で偉そうなんだよ」
突っ込まれ、二人顔を見合わせて笑ってしまった。
何の話してたっけ、と思い出しながらキャンはやっぱりミカと話すのは楽しいと再確認した。
「で、理由だっけ？うーんとさ、男に良い様に扱われるのが嫌いなんだよね。だから男を好きになれる気がしない」
軽いノリで先程は躊躇った理由の一端を口にする。すると案の定ミカは半目で睨んできた。
「男嫌いの癖に何で男買おうっていう発想に辿り着くんだよ」

多分理解はされないだろうな、と分かっていたから落胆はしない。その代わり確実にミカを黙らせる事ができる言葉を口にした。

「いやぁこの前男と寝てみたら意外に良くってさ。多分行為自体は好きなんだよね」

予想通りミカは黙りこくる。男嫌いのキャンが自分から抱かれたのではないと察したのだろう。

次いでに哀れみの視線を向けられたのには少々辟易した。別に自分は可哀想ではない。哀れむくらいなら抱いてくれ、と言おうとしたキャンは、けれどミカの静かな声に邪魔をされた。

「あのさ。キャンがどんな目に合ったか知らないけどさ、男に良いように扱われてそれが嫌だったんだろ？ならさ、今キャンが俺を金で買うのってその男と同じ事しようとしてるって気付いてる？」

「何で？全然違うよ。だってミカは金に困ってて、自分は男を買いたい。女を買う男は一杯いるだろ？それと一緒だ」

キャンはミカの言葉がさっぱり理解出来ない。そもそも自分がされた事は嫌な事ではあったけれど、悪い事ではない。世の中は〝そういう〟ものなのだ。ミカが嫌ならば無理強いするつもりはないのだし。

何故そんなにも怨みがましい視線を向けられなければいけないのか。収まっていたはずの怒りがムクムクと膨れ出す。

「それとも何？報酬が足りないの？銀貨三枚出してやろうか。そしたら大人しく引き受ける？」

腕を組んで睨みつけるとミカは薄く息を吐いて首を振った。

「何でそうなるんだよ。お前本当は貴族とか言い出すんじゃ」
言葉を途中で区切ったミカは、はっとした様にキャンを見つめ動きを止めた。
「まさか本当に貴族なんて事は」
「ある訳ないだろ」
即座に否定した。あり得ない。想像すら出来ない。
きっぱりとした言葉に、安堵の息をもらしたミカはしかし不意に表情を強張らせた。震える唇を無理やり動かす。
「お前、平民出の、女で、剣を使う仕事をしてて、金持ちなんだ、よな？」
一つ一つ区切って確認するように紡がれた台詞に、先が読めたキャンはにっこり笑って言ってやった。
「そうだね」
不躾にもミカはキャンに人差し指を突きさして、その言葉を唇に乗せる。
「お前、女騎士カトリーヌ？」
「そう呼ばれる事もあるね」
肯定してやったら、ミカは世の中に絶望したような悲鳴を上げて喚き散らした。
「嘘だ！カトリーヌはもっと美人で強くて格好良いはずだ！こんな

普通の子供な訳ない！」

キャンはミカの罵声を聞き流しながら大きな欠伸をした。それを合図に部屋が静まり返る。

次いでもう一つキャンがついた溜め息が重い響きをもってミカの耳朶を打つ。否定も肯定もしない疲れたようなそれが、真実を示しているように感じられてしまった。

「本当に、カトリーヌなんだな」

疑問形ではなく自分に言い聞かせるような言葉の響き。キャンが音もなく頷くと、今度はミカが溜め息を吐き出した。

そして一拍置いて頭を下げる様を、キャンは醒めた目で見つめた。結局地位に跪くのか、と。まぁそれで交渉が上手くいけば良いのだが。

「すまん。侮辱した。カトリーヌの事なんか何にも知らないのに勝手に幻滅して悪かった」

しかし予想と違う言葉が出てきて、キャンは目を見開いた。

誠実な響きを持った謝罪は、女騎士カトリーヌへではなく、ただキャン自身を侮辱した事へのみ向けられている。初めてではない。けれど久しいその感覚。自然とキャンの口元がほころんでいく。

「気にしなくて良いよ。慣れてるから」

実際騎士になってから侮辱も罵声も聞き飽きる程浴びてきた。お前など騎士に、聖女の傍にふさわしくない。

今でこそ実際口にする輩は減ったが、度々向けられる視線から如実に感じられる悪意や敵意に囲まれて暮らしているキャンにとって、

ミカの言葉など犬に吠えられたようなものだ。今更傷つくも時間の無駄というもの。

「でも」

「うるさい」

尚言い募ろうとするミカを遮り、話を元に戻す。

「で、正体知っちゃったんだからさ、早めに決断して欲しいんだけど。もし駄目なら他の奴紹介して欲しい。今度は絶対引き受けてくれて、そんで口固い奴」

「てか何で聖女様の護衛騎士が男買うんだよ。俺が誰かに話したら絶対お前職失うじゃん」

息消沈した様子のミカは疲れ切った声で泣き言をもらす。

今にも泣き出しそうに歪んだ表情があまりにも情けなくて。思わずキャンは笑った。

「笑い事じゃねぇよ、ったく」

「まぁまぁ。そんな訳でさ、あんま他の人に知られたくないし。ミカが引き受けてくれたら一番良いんだけどな。人助けだと思って一肌脱ぐ気無い？」

小首を傾げて告げたキャンに、ミカはうっと言葉に詰まった。軽い調子で言われたが、その実内容は酷く重い。意図せず女騎士の弱みを握ってしまったようなものだ。

色々と頭の中で考えを巡らす。そしてすぅと息を吐き出し、覚悟を決めた。

「本当に俺で良いんだな？」

真っ直ぐな視線を向けられ、キャンは到頭自分の望みが叶えられる事を悟った。どうやらミカには金や地位より情に訴えた方が効くらしい、という情報を頭に入れてから笑みを浮かべる。

「良いよ」

「絶対に後悔するけど良いんだな」

真剣な表情で放たれた言葉は、キャンの心を欠片も揺すらなかった。

「後悔なんてしないよ」

右手の拳を突き出したキャンに意図を悟ったミカが左手の拳を突き出す。コツンと小さな音を立て、契約は成された。

# 聖女1

「ねぇ、キャン。恋人出来た？」

お茶の時間だった。ユカリの意向で侍女のマリーと共にテラスに用意された椅子に座っていたキャンは、唐突なユカリの問いかけに思わず口に含んだ茶を吹き出しそうになる。それをすんでの所で堪えて茶化してみせた。

「何言ってるの？恋人なんていないって」

愛人ならいるけど。

「そうかしら。あのね、最近キャンが可愛くなったってマリーと話してたの。ね、マリー」

「えぇ。最近休みの日の前後はすっごく機嫌良いのよ。自分で気付いてないの？ねぇ言っちゃいなさいよ。大丈夫、女同士の秘密にするから」

うっとキャンは言葉に詰まった。確かに心当たりがある。何せキャンの休みに合わせてミカが会ってくれるのだ。夜は酒場での仕事があるから夕方までだけど。

そういえばあいつ昼間は何してるんだろう。聞いても教えてくれないんだよな、とキャンは一先ず現実逃避してみた。

しかしルーファスの軽やかな声で否応なく現実に引き戻される。

「おや、女性同士の秘密ですか。私には教えて頂けないのですか？」

ユカリの命令で一人椅子に腰かける事もせずちょこまかと執事の真似事をしている様はとても騎士には見えない。というより、女の前では言動と性格が百八十度変わっている。今も好青年然とした振る舞いで片目をぱちんと瞑ってみせた。
キャンの目から見たら胡散臭い事この上ないが、ユカリにその正体を告げる事は恐らく一生無いだろう。ユカリは真っ白だから。その透明感のある白さをキャンは存外好んでいるのだ。わざわざ汚そうとは思わない。

ルーファスの言葉に軽く笑ってユカリは扉を指さした。

「ルーファスは男の人だもの。さぁ向こうに行って頂戴。盗み聞きも駄目よ」
「かしこまりました、聖女様。気が向いたら後で教えて下さいね」
「そうね。聖女っていう呼び方止めてくれたら考えてあげても良いわ」

うんざりしたように返すユカリに、けれど、と思う。
ユカリ程聖女という言葉がふさわしい人をキャンは知らない。汚れなく美しく、流す涙は他人の為。無力で非力な癖に、いつの間にか周囲を巻き込んで事を解決してしまう強さを持っている。それは強さではないとユカリと言うが、キャンから見たら立派な強さだ。
キャンだって、ユカリに助けられた。その瞬間から、キャンの主はユカリだけ。

そう、ユカリはキャンの主なのだから命令は聞かなくてはならないのだが。ちょっと今だけは勘弁して欲しい。

「さぁルーファスもいなくなったし話してもらうわよ、キャン」

意気込むユカリにキャンは上体を引くが、消極的な拒絶には気付いてもらえなかった。仕方なくキャンは慎重に言葉を発する。

「何でそんなにユカリは色恋沙汰に結びつけたがるの？休みの日は新しく出来た友達と遊んでるんだよ。王都に来て初めて出来た友達だし、あんまり歳の近い人いなかったから浮かれてただけ」

嘘は言ってない。遊ぶ内容がちょこっとばかり特殊なだけで。

「あらそうなの。で、女の子？男の子？」

「それは……男だよ」

視線をさ迷せてからキャンは腹を決めて疑惑を認めた。

途端ににやつき始めたユカリとマリーを横目で睨みながらふくれっ面を作る。何で女の子っていうのは他人の色恋沙汰でそんなにはしゃげるのかキャンにはさっぱり理解出来ない。

「でも恋人じゃないから！変な勘違いはしないでよ」

釘を押してみても、返ってきたのは信用ならなそうなにやけた顔だった。

「ふぅん。恋人じゃないんだってマリー」

「そういう事にしておいてあげましょうかユカリ様」

「もう。二人して何なのさ！」

耐えられなくなって立ち上がったら流石に懲りてくれたのか。ユカリも立ち上がってキャンの赤い髪をすくように頭を撫でてくる。こんなので誤魔化されないからな、と一瞬強がってみても、ユカリの手つきの穏やかさに眉間に寄った皺が消えてしまった。結局ユカ

リには敵わないのだ。

「ごめんなさいね。キャンに友達ができて、私嬉しかったの。でもキャンったらなかなか教えてくれなんだもの。意地悪しちゃった。許してくれない？」

キャンより少しだけ高い所にある黒い瞳は真摯な光を湛えている。そんなきらきらした輝きで見つめるのは反則じゃないかな、なんて思いつつ、口元に浮かんだのは微かな笑みだった。

「許す。許しますからそんな目で見ないでよ、ユカリ。アレクシス様にこんな所見られちゃったら自分殺されちゃう」

「あら。アレクはそんなに心狭くないわよ」

嘘だ、と即座にキャンは思った。

本当に騎士団の男共はユカリの前で猫を被りまくっている。アレクシスの独占欲はかなりのもので、女のキャンにまで時折その被害はやってくるのだ。しかもユカリが鈍感なのか男共が上手くやってるのか知らないが、本気でキャンが命の危険を感じる時がある事をユカリは気付いてくれない。

あぁなんて可哀想なんだろう、自分。

「って話反らさないでね、キャン。全くもう、貴方自分に都合悪い事あるとすぐ逃げるんだから」

賢いユカリにえへへ、と緩んだ笑みを浮かべるも、今度は騙されてくれなかった。

「いい？キャン。友達でも恋人でも良いから、大事な人が出来たんならちゃんとキャンもその人の事を大事にするのよ。そしたらキャ

ンも幸せになれるわ」
「ユカリお母さんみたい」

茶化してみせたけど、半ば本気でキャンは言った。お母さんなんていた事無かったけど、こんなお母さんだったら良かったな、という希望。勿論ユカリは唯の冗談として受け取ってくれた。

「嫌だ。私まだ18なのに。せめてお姉さんでお願い、じゃなくって真面目に私は言ってるのよ。キャンには世界で一番幸せになって欲しいの」

その発言にはちょっとどころかかなり驚いた。同時に頬が熱くなった。ユカリが本気で言ってくれてる事が分かるから、尚更照れる。口の中でうぅと小さく唸って結局キャンはささやかな声で聞いてみた。

「ユカリは、今幸せ？」

するときょとんとした顔になって。すぐにユカリは穏やかでいて満ち足りた笑みを浮かべる。それでキャンには充分だった。

# 聖女2

「お前さぁ。本当に聖女様の護衛騎士なんだよな」

何を今更な事をと思いつつキャンはベッドの上で服を着ていく。その様をぼんやり眺めつつ呟いたミカはやせ細った上半身を晒したままだ。といっても騎士団の男連中を見慣れたキャンにとって細い、というだけで同年代の少年と比べたら普通なのだが。失礼な感想をキャンが抱いている事をミカは知らない。

「いきなりどうしたんだよ、ミカ。ボケたか？」

「いや。聖女様ってどんな人なんだろうって思って。式典の時に遠目からしか見た事ないからさ」

「美しい人だよ。間近で見たら髪も瞳も真っ黒でさ、本当吸い込まれそうなの。背は自分よりちょっと大きいくらい？三つ歳上だけど同い年にしか見えないくらい童顔でさ。なのに良い身体つきしてるんだよなぁ」

「おい待て」

こんな感じ、と手で空中に再現してみたのがお気に召さなかったらしい。言葉と共に手を掴まれてしまった。

「キャン。お前は女の子だ」

真面目くさった表情で言われ、キャンも頷く。

「まぁ女だね。ミカといるとつくづくそう実感するよ。さっきも胸もまれたら」

ついにもう片方の手で口も塞がれてしまった。
ミカの挙動不審の理由は分かるが、いい加減慣れろと言いたくなる。もうこういう関係になって一ヶ月になるのだ。キャンはキャンで何も変わらないのに、ミカの抱く女の子像を押し付けて欲しくない。
しかし、その一方でミカの新鮮な反応が好ましいと思う自分もいるから、キャンは困ってしまう。今も頬を真っ赤にしながら上目遣いにキャンを睨んでくるのだ。

「女の子がそういう事言ったらいけません」

返事の代わりに掌をぺろっと舐めてみると、期待通りに声にならない悲鳴を上げて手を引っ込める。本当に可愛い男だ。

「ミカって良い反応するよね」

ミカの自尊心を傷つけないよう細心の注意を払って褒めてみる。と、深い溜め息をつかれた。可愛いが失礼な男でもある。

「本当にお前聖女様の護衛騎士かよ」

今一度独り言のように漏らされた言葉には苦笑するしかない。流石にその言葉の意味する所が先程と違う事は分かった。しかし、仕方ない。何せもう一人のルーファスからして女遊びが激しいときてる。キャンなんて愛人一人だけなのだし可愛いものだ。
それに、とキャンは思う。

「自分が護衛騎士になったのは特例中の特例だよ。時々自分でも何やってるんだろうって思うしね」

掛け値無しの本音は驚く程するりと口から飛び出た。
しかし一瞬後に冷静になる。と同時にキャンは眉間に力を込めた。
「今の無し。聞かなかった事にしといて」
気が弛んでいたとしか言い様がない。大失敗だ。
一人落ち込み黙りこくってしまったキャンに、ミカは少し考えてから慰めを口にした。
「なんかよく分かんないけどさ。後悔って誰でもするもんだしさ。たとえ自分の選んだ道でも、嫌になる事くらいあるだろ。そういうの口に出しても良いんじゃね？ってかいつもいつも俺の都合お構いなしに愚痴吐きまくってるんだから今更何戸惑ってんだよ、って俺は言いたい」
真面目くさった口調に、ついキャンは吹き出した。
「お前なぁ。折角人が真剣に！」
「ごめんごめん。分かってるよ。そうだよなぁ。今更だよな。ミカの前ではカトリーヌでいなくて良かったんだ。そうだった」
自分に言い聞かせるような響きの言葉に、ミカの怒りは行き場を失ってしまう。じっとキャンを見つめて言葉を待つと、大人びた笑みを浮かべて口を開いた。
「あのさ、ミカの言う通り。自分は聖女様の傍にふさわしくないよ。そんなの最初っから分かってる。性格の話だけじゃなくって力量の話ね。まぁ性格も悪いんだけどさ」

キャンは話しながら二年前の事を思い出していた。

まだキャンが一傭兵でしかなかった頃。

今の後見人に拾われて、剣を与えられて、魔物退治に明けくれていた。女は剣を持ってはいけなかったから、男の振りをして。

そんな時、アレクシス率いる軍隊に参加する事になったのだ。キャンの拾い主は聖女に取り入れと命令を下した。そうする事で、女の身でも剣を持つ事ができるとそそのかされた。

「最初はさ、聖女様に取り入るつもりだったんだ。でもさ、実際近づいてみたら聖女様の秘密を知っちゃって」

下心を持って近付いた相手は、聖女ではなかった。

異世界から来たという唯のひ弱な女の子だった。聖女ではないと声にならない悲鳴をあげ、家に帰りたいと泣き叫び。キャンに助けを求めた。

キャンは、それに答えたつもりだった。幸せに生きてきたと一目見て分かる傷一つない手を引いて、女二人逃げ出した。自分にも人を助ける力があると過信していた。

逃走劇の終わりはすぐに訪れた。

魔物の大群に襲われ、キャン一人でユカリを守る事は出来ず、結局彼女を助けたのは元凶のはずのアレクシス。しかも、聖女をかどわかした罪で処刑されそうになったキャンを助けたのは、無力なユカリだった。

キャンを助ける代償に、か弱き少女は聖女を演じる事を引き受けた。

「秘密を守る為に自分は護衛騎士に任じられた。他にも大きな犠牲を払ってる。そこまでする価値が自分にあるのか、今でも分からな

いよ」

無力なキャンは、生かされている。護衛騎士という役割を与えられ、ユカリに守られている。その負い目があるから、キャンは今までどんな辛い目にあっても逃げ出す事はしなかった。

秘密を知ったキャンが逃げたらアレクシスに殺されるから、という理由もある。けれどそれと同じくらい、逃げたら自分を助けたユカリの覚悟が無駄になると分かっているから。

ユカリに助けられた時から、キャンの居場所は彼女の傍以外に存在しないのだ。

「まぁ結局は自分が力を付ければ良いだけの話なんだけどな」

ひとしきり想いを吐き出して、キャンはすっきりしていた。ユカリには勿論の事、全ての経緯を知る騎士団の連中にこんな愚痴を吐ける訳が無い。二年前からずっと心の内に沈んだ想いを口に出すだけで、随分気が楽になっている。

それを引き出したミカは、神妙な顔つきをしていた。

「どうした？」

具体的な話はすっ飛ばしたので重い話にはならなかったはずだが、と自分の発言を思い返していたキャンの耳に、か細い音が届いた。

「あのさ、聖女様の秘密ってそんなにやばい秘密なのか？」

恐る恐るといった様子のミカが面白くて、キャンはからかう気持ちで脅しをかけてやる。

「あぁ。自分は聖女様の御慈悲で助かったけど、普通なら知った時

点で言葉通り首が飛ぶな」

親指で首をかっ切る真似をしてみると、ミカは身体を震わせた。

大袈裟な表現をしたが、丸っきり嘘という訳ではない。何せユカリは神ヤーンの使者を騙っているのだ。真実が知れたらユカリは勿論の事、首謀者であるアレクシスの身も危うくなる。

「だから、ミカにも教えられない。首が飛ぶ覚悟が出来たら自力で探ってみれば？」

「いや自殺願望はないから止めとくよ。ってかお前意外に危ない橋渡ってんだな」

「代わってやろうか？」

「遠慮する」

即座に断ったミカは、けれど穏やかな表情を浮かべてキャンの頭を撫でてきた。

「本当、お前はすげぇよ。頑張ってんだな」

何を頑張ってるかも知らない癖に勝手な事言うなよ、と思うものの、何故かキャンはミカの手を払う事は出来なかった。

## 恋心1

始まりはミカの一言だった。

「なぁキャンってさ、俺の事好きなの？」

情事を終えたベッドの上。

困った様な表情でそう尋ねるミカに、キャンは思いっきり呆れてみせた。

「は？気色悪い事言うなよ」

睨みつけたにも関わらず、ミカは更にもじもじしながら言葉を続ける。

「いやだってさ。お前最近会ってる時ずっと機嫌良いし、なんかすぐくっついてくるじゃん」

ミカの言葉に自分の腕の行方を辿ると、確かにミカの腕に巻き付いていた。無意識って怖い。

ごほんとわざとらしく咳をして、キャンはとりあえず言い訳を試みる。

「いやだってさ、ミカの体温気持ち良いんだもん」

そう、温かいのだ。生き物の習性として間違っていない、と習性の意味もよく分かっていないキャンは自分を納得させる。

しかしミカはキャンの言い訳を無視して言葉を続けた。

「その癖俺が手伸ばすと避けるし」

言葉と共に頭に向かって来た手を反射的に避けてからキャンは動きを止めた。得意そうにほら、と言い張るミカにどう反応して良いか分からず、戸惑った自分を恥じるように声を荒げた。

「うるさい！ミカの事なんか好きでも何でもないんだからな。調子に乗るな。自分はお前を金で買ってるだけだ！」

頬を真っ赤に染めたキャンは、言い募りながらも胸を引き裂かれるような痛みを感じた。

自分でも分かっているのだ。自分はユカリの護衛騎士としてふさわしいのか。そんな疑問をミカの前で口に出してしまってから、どうも気が弛んでしまう。やはり言うべきでは無かったと後悔するも、既に遅い。

ただどうしようもない苛立ちをぶつける様に、上衣から銀貨を一枚取り出しミカに向かって放り投げた。それはミカの頭に当たり、ぽすんとベッドに落ちる。

「ほら、拾えよ」

ミカは何も言わず銀貨を手に取り、目を伏せながら口元だけで笑みを形作った。

「だよな。お前は俺の事好きでも何でもないよな。なら」

そこで言葉を区切ったミカを訝かしく見つめるも、続きを紡ぐ事なくミカは視線を上げて乾いた笑みを浮かべる。

「何でもないよ。俺の勘違いだった。気にするな」

そう流されると気になるが、話題を蒸し返すのも気が引ける。

沈んだ様子のミカにううと唸ってから、とりあえず謝ってみた。

「お金投げてごめん。また会ってくれる？」

恐る恐る伺うように尋ねたのは怖かったからだ。これでミカに嫌われたら、すっごい傷つく。それだけは分かる。今の自分に、ミカの存在は必要だ。騎士団の連中やユカリには言えない本音を吐き出せる正に癒し的存在。そうキャンは認識している。

「しょうがねえな。会ってやるよ」

苦笑を浮かべながら自分の我侭を許してくれたミカに、キャンは漠然と思った。

やばい。ミカの事好きかも。

いやでもな、とミカと別れて城へと向かう道すがらキャンは自分の気持ちを整理してみた。

好きは好きでも、ミカと付き合いたいとかそういう気持ちは全く湧かない。むしろ今の様に身体だけの関係で結構満足している。愚痴吐いたら聞いてくれるし。くっついても暑いとは言われるが離れろとは言われないし。何だかんだで甘えられている気がする。

そして、そのように甘えられるのはキャンがミカを金で買っているという大前提があってこそだ、とキャンは自覚していた。もし金の繋がりがなしで付き合えたら、と想像してみるが、すぐに行き詰

まった。だってそしたらミカはキャンと付き合ってくれない。自分に女としての魅力がない事くらい分かっているのだし。

「ああ面倒くさい」

とうとうキャンは考える事を放棄した。うじうじ悩んでいる自分が気に食わないというのもあるし、現状で満足しているんだから、もう悩むのは止める。そう決めたら清々しい気分になれた。

うん。今日は久しぶりに騎士団の食堂でがっつり食べてゆっくり寝よう。

そうして騎士団の食堂にたどり着いたキャンが三人分はある食事を腹に収めていた時だった。目の前の席が引かれ、顔を上げた先にいた人物に思わず眉根が寄る。

「カトリーヌ、お前恋人出来たんだって？」

何故ユカリと同じような事を言ってくるのだろう。やはり夫婦だからか。波長が合うのか。

「ああそう嫌そうな顔をするな。ユカリからちらっと話を聞いただけだ」

アレクシスはにやにやと笑いながらそんな事を言ってくる。ので キャンは嫌そうな顔をやめられない。一国の王子が一騎士の恋愛沙汰に首突っ込むなと言いたい気持ちをぐっと堪えて素っ気無くキャンは、ユカリに言ったのと同じ言葉を口にした。

「恋人ではありません。唯の男友達です」

「ほう」

瞳にぎらぎらとした眼差しを宿したアレクシスに、キャンも真面目な話だと悟って姿勢を正す。

「何か問題が？」

背筋がぞくっとするような鋭い目つきに威圧されながら、何とか問うてみれば、アレクシスは声を潜めて警告を発した。

「恋人だろうと男友達だろうと関係ない。ただお前がうっかりユカリの秘密を漏らしたりしたら…分かってるな？」

食べ物を詰めた胃がキュッと収縮するのが分かる。

ただただ怖かった。流石は第一騎士団を束ねる長だ。その名は伊達ではない。魔物退治を共にした時にアレクシスの勇姿は目にしていたが、彼の本質が修羅である事をキャンは今更ながらに再確認した。

「重々承知しております、殿下」

震える声でそう告げれば、用は終わったとばかりにアレクシスは立ち上がる。序でのように頭をぐしゃぐしゃと掻き回したのはキャンの緊張を解く為であろう。

「一杯食えよ」

最後に優しいとも取れる言葉を残して彼は去っていった。本当にキャンに忠告する為だけに来たのだろう。本当に死ぬかと思った、と未だ震える手を机の下に押し込みながら、キャンはやっぱりアレ

クシスは危険人物、と頭に刻み込んだ。

## 恋心2

後見人から手紙が来た。

『お前にも男作る甲斐性があったとは驚きだ。今度会った時には盛大に祝いをしてやる。子供が出来たら寄越せ。お前には育てられまい』

キャンはさらっと一読した後くしゃっと紙を潰して暖炉に放り込む。

何故だ？何故ばれた？

どうせ後見人が王都に放っている監視の者が知らせたのだろうと分かっているが、胃がムカムカする。

アレクセイにもバレていた。その次は後見人。

自分は一体どれ程の人に監視されているのだろう。

自分はそれ程の価値がある駒か？

「今日もまた機嫌悪いな、キャン」

「良いからヤろうよ、ミカ」

いつになく乱暴に服を剥ごうとするキャンの手を、ミカの手が包む。

「何？邪魔」

睨みつければ、ミカは苦笑しながら懐から飴を取り出してキャンの口に放りこんだ。

「む、むむ」

「甘いだろ？お前さ、怒りっぽい時って絶対腹減ってるじゃん。飴舐めたら多少はマシになるんじゃないかなぁって思って」

「むー」

ミカの言う通りになるのは多少癪に障るが、確かに口内に広がる甘さのお陰かちょっとムカムカが収まった。右頬に頬張って。左側が寂しくなってきたから舌を使って左頬に押しやって。そんな事を繰り返していく内に夢中になって舐め回す。ふと気付ば、飴玉は小さな小さな欠片となってしまった。舐めるのが勿体なくて舌の上に乗せてそっとしていたのに、いつの間にかじわっと溶けてしまう。

「ん」

キャンはまだ余韻のある内に、と舌を突き出す。ずっと面白そうにキャンを眺めていたミカは、その行為に首を傾げた。

「何？キスの催促？」

初めはキャンに押され気味で躊躇っていたミカも、最近は余裕ができたのか時折冗談を織り混ぜるようになってきた。それを物足りなく、けれど新鮮な気持ちで受け取めながらキャンは事実催促した。

「飴。もっとちょうだい」

一拍置いて意味を理解したミカは、怪訝そうな表情をゆるっと崩

す。そして至極嬉しそうに懐からもう一つ飴を取り出し、キャンの舌の上にちょこんと置いてやった。

「何？」

緩みっぱなしのミカの表情に良くないものを感じたキャンは精一杯剣呑な声を出した。だが、口内の飴を舐め回すのに必死で何処か気のない声になっている事に気付いていない。その様子に、ミカははっきりと笑った。

「別に。ただ、野生動物を手なずけるってこんな感じかな、って思って」

含み笑いで告げられた言葉に、キャンは奥歯でがりっと飴を砕いた。衝動でやってしまった為、すぐに後悔する。けれども聞き捨てならないではないか。

手なずける？いつ？誰が手なずけられた？

有り得ない。確かに自分はミカにちょっとばかり気を許してるかもしれないが、それは許してやってるのだ。決してミカ主導ではない。そんな認識、許せない。

「おい、キャン？野生動物に例えたの悪かった？」

目尻を下げて心配そうに聞いてくるミカに無言で首を振る。

野生動物なんて、褒め言葉にしか聞こえない。人間らしいなんて、言われたくない。最高じゃないか、野生の動物。飼い馴らされず、自由に駆ける生き物。見えない鎖に捕われ続ける自分にとって、憧れの存在。

だからさ、ミカごときに飼い馴らされるなんて、冗談じゃないんだよ。

キャンはそう心中で呟き、にっこりと笑みを作った。そのままミカのズボンを勢い良く脱がした。ミカの上げた悲鳴を無視して、直接刺激を与えれば、見る間に抵抗が弱まった。
その様にやっとキャンは一息つけたのを感じる。こうではなくてはいけない。自分がミカに悪戯を仕掛け、ミカが反応を示す。それ以外の関係など、考えただけで苛々する。

「本当お前さ、急に機嫌悪くなって俺襲う癖どうにかならない？」
事が済んだ後うんざりした様子で服を着込みながらミカはぼやく。一方すっきりしたキャンは既に服を着て銀貨を弾いて遊びながら答えた。

「何で？金で買われてるんだから文句言うなよ」

ミカが深く息を吐きながら額に手を当てる様を見てキャンは居心地の悪さを感じた。でも間違った事は言ってないはずだと胸を張る。

「ミカだって金が必要だから自分と寝てるんだろ？なら少しくらい我慢しろ」

自分で言ってキャンは言い様のない胸の痛みを感じて眉をしかめた。
けれど、その通りのはずだ。ミカは金の為に自分と寝ている。そこに少しの情が芽生える事はあっても、愛情と名がつく事は有り得ない。

「あのさ、俺はそれなりにキャンの事好きな訳。あんまり幻滅させ

るな」

あぁやっぱり、とキャンは心中で呟く。それは唯の情でしかない。それでも好きと言われた事に鼓動が高鳴る自分を、キャンはいとましく思う。

面倒臭い事は嫌いだ。恋愛に頭を悩ませるなんて、面倒臭い事の最たるものではないか。

意図的に作った笑顔でキャンは軽口を返す。

「それなりじゃなくてちゃんと好きな女の子出来たら解放してあげるよ」

多分実際そんな相手がミカに出来たらきっと自分はすごく悲しくなるけれど。それでも惨めたらしくミカにすがりつく程自分は恋愛にのめりこめないと分かっている。

キャンの笑みが何処かもの悲しい虚しさを纏っている事に気付いてしまったミカは一瞬視線を伏せ、唇を噛み締めた。

身体を重ねる度にもつのは、相手が紛れもない女の子であるという実感。いつもひねくれた事しか口にしない彼女は、けれど最近全身で好意を示してくれるようになった。その様子をいとおしいと思い始めている自分に、ミカは毎回動揺してしまう。

今はまだキャンに気付かれていないけれど。願わくは一生気付かれませんように。そう念じてからミカは顔を上げる。

「そうだな。俺もそろそろ愛人じゃなくて恋人欲しい」

晴れやかに言ってのけ、次の瞬間表情を曇らせるキャンを視界に入れたミカは何とか溜め息を抑える。本当に、初めっから愛人契約

なんて結ぶんじゃなかった、と後悔しても既に遅い。襲い来る罪悪感を懸命に無視して、ミカは微笑みを浮かべ続けた。

## 喧嘩

それは突然の出来事だった。

いつものようにユカリと侍女のマリーとお茶をして。先輩のルーファスが執事のように細々と世話をやいて。

そんな最中、いきなりユカリが気分が悪いと言って食べた物を吐いてしまったのだ。

直ぐ様御殿医を呼びに走ったキャンは、診察が終わるまで気が気じゃなかった。菓子に毒が入っていたのだろうか。また自分はユカリを守れなかったのか。などなど様々な妄想が次々に頭に浮かんでは消え、悲嘆に暮れていたキャンに満面の笑みを湛えたルーファスの口からもたらされた知らせ。

それを耳にしたキャンは、思わず聞き返した。

ユカリ懐妊。

紛れもない祝事である。

それからは慌立たしく時は過ぎた。生まれて来る子の父親であるアレクセイに知らせに走り。何故か敷かれた箝口令に従い必要最低限の人数で休むユカリの護衛をし。

いつもの酒場に行く頃にはとうに日も暮れ、キャンはくたくたに疲れきっていた。

「いらっしゃい、ってキャンか。今日は遅かったな」

笑顔で出迎えてくれたミカにキャンは肩の力が抜けるのを感じる。疲れた。本当に疲れた。何せユカリが吐いてからずっと気を張りっぱなしだったのだ。定位置の椅子に腰掛けふうと深く息を吐き出す。

「そうなんだよ。ちょっと予定外な事が起こってさ。お陰でこんな時間までずっと仕事。お腹すいた。適当にどんどん持って来て」

机に額をくっつけながらぐうと腹を鳴らしたキャンに、ミカは苦笑をもらす。相当参ってるな、とくしゃくしゃの赤い髪を撫でて、ポケットからそれを取りだし机に置いた。

「ほら、それでも舐めて待ってろよ。すぐ何か持ってくるから」

ミカの手が離れていく事を少し寂しく感じながらキャンはゆっくり頭を上げ机に置かれた物を確かめる。無造作に転がっていたのは赤い飴玉。

本能に従い直に舌を伸ばす。汚いとかそういう衛生観念はもうキャンの頭からすっ飛んでいた。目の前に食べられる物があれば迷わず飛び付け。幼い頃下町で植え込まれた習慣はそう簡単に抜けやしない。

そんなキャンの様子を全て見ていたミカは思わず額を手で覆っていた。

既にキャンの行儀の悪さはよくよく身に染みて分かっているはずだった。でもこれはない。仮にも聖女様の護衛騎士が。

しかしまたキャンにどんな苦言忠告をしても全て右から左に流されてしまう事もよく知っているから。

ミカに出来る事は料理人に早く料理を出すよう急かす事だけだった。

「はいよ。お待たせ」

飴玉を補食した後すぐにまた机に突っ伏したキャンを哀れに思ったのか、料理人は先に手早く三品程作ってくれた。それをどんっと机に置けばびくっとキャンの薄い肩が跳ねる。

寝てたのか。

「え？あぁ、頂きます」

夢から覚めて一瞬周囲に視線をさ迷わせたかと思いきや、その視界に料理を捉えた途端状況判断より食欲を優先させた少女。

ミカはちょっと哀れみ通り越して本格的に心配になってきた。大丈夫かな、この子。というより無理な労働強いられているんじゃないの？と心底不安になってくる。

「大丈夫か？キャン。今日そんなに仕事辛かったのか？」

仕事の内容は極秘な為、ミカは小声で話しかけた。しかし、キャンは食べる事に夢中でミカを見ようともしない。暫く放っておくか、と結局諦める事にした。

そうしてキャンが一心不乱に軽く五人分の食事を食べ終えて一息ついた頃。店主がミカに話しかけた。

「ミカ、ちょっと休憩入れ」

思わぬ優しい申し出にミカは目を丸くする。もうじき夜半という頃合いだが、店自体はこれからがかきいれ時だ。思わず店主を訝し気に見やれば、顎をしゃくりキャンに視線を向けた。

「ありゃ相当疲れてんだろ。あんなんでもお得意様だしな。お前仲良いんだろ？」

暗に話を聞いてやれ、と言ってくる店主。しかしミカはすぐには頷けない。すると彼はミカの頭にぽんと大きな掌を伸せぐしゃっと乱暴にかき混ぜた。

「最近お前ら仲良いじゃねぇか。数少ない友達なんだろ？たまには子供らしく友情ごっこも楽しめや」

店主はキャンの事を男だと思っている為、仲が良いというのは友情を指すのだと分かっている。

しかし、実際にやっている事が事なだけにミカは赤面し口の中でごにょごにょと言い訳した。

それを店主は照れ隠しと捉えて強引にミカの背を押す。

「ほら、さっさと行ってさっさと帰って来い」

「う、と。はい」

勢い良すぎて前のめりになったミカがそのままキャンの元へ行くのを店主は、うんうんと満足気に見守る。

放っておけば休みも取らず仕事ばかりに励むミカを、前々から店主は心配していた。まだ若いのに女を作る素振りさえない。

そのミカを頻繁に遊びに連れ出してくれる相手。それだけで店主はキャンに感謝している。

それにあのまま育って酒を飲むようになったらきっと良い金蔓になるだろうし。

そんな店主の思惑は数年後的中する事になる。

「で、どうしたんだよ」

裏口まで引っ張って来られたキャンは、ミカのそんな言葉にちょっと感動した。

普通に心配されてる！

騎士団の連中は大概キャンの悩みなど取るに足らない事だと決め付けているし、ユカリは心配してくれるが愚痴など吐けない。

本当に良い奴だよな、と頬を弛ませながらキャンはぽつりぽつりと吐き出した。

「上司に子供が出来た」

休憩中という事もあり水を飲んでいたミカがキャンに向けて思いっきり吹き出す。水飛沫を浴びたキャンはじとっと恨めしげな視線を送った。

「ごめっ。え？それ本当？すごい祝い事じゃん。おめでとう。あれ、でもそんな噂全く」

キャンが上司という単語を出せば、それは聖女ユカリを指すという共通認識は二人の間で出来上がっている。

しかし、聖女ユカリが懐妊したとなればそれは大騒ぎになるのでは、とミカは考えたのだが。

「箝口令が敷かれてるんだよ。暗殺とか心配してるの。ほら、まだ王位争いの決着ついてないじゃん」

キャンは軽く言ったが、内容は酷く重い。

現在次期王位候補として有力視されている王子は第一王子のヒーストンと第三王子のアレクシス。
魔物退治で活躍し、聖女ユカリと結婚しているアレクシスは非常に民の人気が高く、これで子が出来たら益々アレクシスを王にと求める声は大きくなるだろう。
それらの事情を頭に思い浮かべたミカは深い息を吐き出す。

「そんな大事な事俺に言っちゃ駄目じゃん。お前口軽過ぎ」

ついでに額を小突けば可愛らしくない悲鳴と共に可愛らしい台詞が返ってきた。

「いってぇな。別に良いじゃん。ミカだから話したんだってば」

拗ねた台詞の裏にある真っ直ぐで純粋な好意に、ミカはちょっとたじろいだ。
どうしよう。かなり信頼されちゃってるし。というか、やっぱりキャン俺の事好きなんじゃ……。
しかも、そんな明け透けな好意を嬉しいと感じてしまってる自分もいるものだから、ミカは頭を抱えたくなる。
嬉しいような嬉しくないような、誤算。それでもミカの取る行動は決まっているから。

「なぁ、キャン。お前さ、護衛騎士向いてないよ」

そう告げるのが、ミカにとって精一杯の好意の表し方だった。

「良い機会じゃん。お前の上司も妊娠したし。キャンだって女としての幸せ手に入れても」
「は？」

しかし、返ってきたのはそんな冷たさを詰め込んだような声だった。

「男作れって言うのか？自分に？無理だろ」

取り付く島もない返答に、ミカはちょっと言葉に詰まった。しかし、ミカから見ればキャンは女の子でしかないのだ。ベッドの中での姿を知っているミカにとっては。

だからミカはきちんと視線を合わせて強く言い聞かせる。

「キャンはちゃんと女の子だよ。だからこの機会にちゃんとした男の人と」

「ミカは！？」

怒鳴るような問い掛けに、息を呑む。そんなミカにキャンは更に言い募った。

「ミカだったら自分をもらってくれんの？女としての幸せくれんの？」

失敗した、と理解した。まさかここで告白まがいの言葉をキャンが発するとは思っていなかった。

ミカはちょっとだけ考えて、答えを出す。双方にとって今後最も良いと思えた答えを。

「俺は、無理。大体キャンと、その。そういう事してるのはそういう契約だからだし。だからさ」

他の良い男を探せ、と言おうとした。

けれど、頬を張るこぎみ良い音に邪魔された。
一瞬遅れて傷みが走る。騎士をしているだけだって、重い張り手だった。拳でなかっただけ運の良い方か、と何処か冷静に考えるミカの視界に、涙を流すキャンがうつりこむ。

「ミカの馬鹿！」

即座にキャンは踵を返したけれど。
確かにミカの目はその涙を捉えていて。

「本当、馬鹿だなぁ。俺」

それなりに好いた相手だった。両想いといえる相手だった。けれど、答えられない理由があった。
じんじんと痛むのは、頬か、それとも胸か。
そっとミカは胸に手を置いて俯き。次に顔を上げた時には既に決意のこもった強い光を瞳に宿していた。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1701n/

愛人契約

2011年10月7日19時36分発行